

D X最新情報、可能性で議論

第5回ピッチイベント

インフラメンテ国民会議九州



産学官民で構成するインフラメンテ国民会議九州フォーラム（フォーラムリーダー・日野伸一九州大学名誉教授）は26日、第5回ピッチイベント「写真」を、福岡市の福岡国際会議場で開催した。今回のテーマは、「インフラDXが創り出す安全・安心・豊かな未来社会」。DXの最新情報についての講演や、メンテナンス分野でのDXの可能性に関する

パネルディスカッションを行った。日野氏は冒頭、「多くのインフラ施設は自治体に管理を依存している。市町村支援助と、住民の理解・協力の促進が課題だ。イベントが、今後のインフラメンテの取り組みに有意義な情報をもたらすことを願っている」とあいさつ。九州地方整備局の藤巻浩之局長は、「民間は、役所よりもはるかに変化に対応する

スピード、感覚を持っていて。民間の培った高い技術を、メンテナンスに困っている自治体に提供するというイベントの意義は大きい」と述べた。今回のピッチイベントは、第1部講演、第2部パネルディスカッション等の2部構成で実施した。国土交通省総合政策局公共事業企画調整課事業総括調整官の木村康博氏は、「国交省が描く建設DXを活用する未来」をテーマに講演。AIを活用したインフラ点検・診断の効率化や、国交省がオープンデータとして公開している3D都市モデルなどを紹介した。

福岡県交通基盤部政策管理局建設政策課インベション推進班班長の杉本直也氏は、具土全域の3次元点群データを取得し、仮想空間にも一つの福岡県を構築する「VIRTUAL SHI ZUOKA」の取り組みについて講演。災害前と後のデータを比較することで、地形の変化などを迅速、安全に把握することができると述べた。また、外部のサポートを得るためにも「データがオープンであることが重要」と強調。建設ITジャーナリストの家人龍太氏は、ロボット・AIが人間とともに働く未来のメンテ現場をテーマに講演した。

（一社）ツタワルドボク代表理事の片山英資氏を進行役としたパネルディスカッションには、講演した3氏が参加した。家人氏は、DXを使った未来のメンテナンについて、「道路下に何が埋まっているかなどを透視できることが当たり前になる」との見方を示した。杉本氏は、「インフラを管理者別に維持管理する時代ではなく、地域や面で考えるようになる」と語った。また、木村氏は、「メンテナンスは、9年前の笹子トンネル事故以降に注目された新しい分野で、色々な可能性がある。ベランチャー等にもどんどん入ってきてほしい、市場を広げてほしい」とした。

九州地整の森下博之企画部長もディスカッションに参加。「局のインフラDX推進室では、面白い技術を見つけ、どのように使えるか考えている。使える技術はどんどん使ってほしい」ということで、頑張っている」と述べた。フォーラムサブリーダーで、（一社）建設コンサルタンツ協会九州支部顧問の福岡宏治氏は、閉会に際して「今後も、自治体からのニーズと民間からのシーズのマッチングによる課題解決に向け、情熱をもって取り組んでいきたい」とあいさつした。